第 19 期京都教師塾　塾生通信

学びの広場

京都市教育委員会
教員養成支援室
令和７年１月18日　No.8

第7回の専門講座は午前2講座、午後2講座の計4講座を実施しました。志望校種・職種に該当する塾生は専門的な知識や実践について学びを深めることができました。また、小学校や中学校志望の塾生にとっても、高等学校や養護教諭、総合支援学校、栄養教諭のことについて学べる貴重な機会であり、それぞれの校種とのつながりを意識したり、様々な職種の人と連携したりする中で児童生徒を育成していくことの大切さを学ぶことができました。

第7回京都市教育学講座［高等学校専門講座］
学校指導課　上杉　まり　指導主事
『高等学校における教師の実践』

塾生のレポートより

今日の講義で印象に残ったキーワードは 3 つある。1 つ目は、「『面白さ』を伝える」ことである。やはりこれが教師の原点であると感じた。そもそも私が教師を目指したのは、生徒に英語を好きになってもらいたい、そして学校の楽しさを知ってほしいという思いからである。まずは、英語という教科の楽しさを伝えることを意識していきたいと思った。英語を話すことができる・文法を知っているから楽しいではなく、英語を使えばこんなことができるんだというその先の楽しさを、授業を通して伝え、そのために自分で勉強してみようと思わせることができれば良いと思った。学校が嫌いな生徒が、少しでも私の授業を楽しいと思ってくれたら、英語の授業が学校に来る目的になるかもしれない。

2つ目が、「生徒から寄りかかってもらえる教師」である。私自身の経験を振り返ってみると、中学生の時は自分から教師に寄りかかれるようなタイプではなかった。しかし、高校生になって大学受験が近づくと悩みが増え、担任の先生に相談することが多くなった気がする。なぜ相談しやすかったのかを考えると、相談するとその日のうちに答えを返してくれたからだと思う。その場ですぐには返事できなくても、その日のうちに返答をくれることで自分のことを忘れずに考えてくれていることに安心感を持った。どの生徒からも寄りかかってもらうことは非常に難しく、限界がある。誰かにとって、私が相談しやすい・安心できる存在になっていたいと思った。

3つ目が「自分の言葉で伝える」ことである。これは2つ目にも通じる部分がある。今まで頭のどこかに、教師というものは生徒の前で完璧な人間でなければならないと思ってしまっていた。しかし、実際には教師にも後悔していることや失敗があり、それを生徒に伝えることで、より生徒にとって教師が身近なものに感じ、相談しやすい存在になっていくのだと思う。生徒の前でずっと完璧な姿しか見せるのではなく、自分にもこんなことがあったということを伝えてあげたい。また、自分の発したどの言葉が生徒に影響を与えるか分からない。良い方向にも悪い方向にもなり得る。その点に関しては、教師は気をつけていかなければならないとあらためて感じた。

高等学校における教師の実践の講座から３つの事が印象の残ったようですね。教科の「『面白さ』を伝えたい」という教員の目指された原点となるようなことについて、再確認されたようですね。楽しさを伝える中から、子どもたちが「自ら学びたい」と思えるような授業に向けた前向きな気持ちが伝わってきました。「生徒から寄りかかってもらえる教師」に関しては、自身の経験ともリンクさせ「相談しやすい・安心できる存在」について考えられていますね。「自分の言葉で伝える」という事についても目が向けられていますね。実際の現場で、子どもたちと過ごしている様子をイメージして、学びをいかしていってくださいね。

～クラス担当スタッフからのコメント～

第7回京都市教育学講座［養護教諭専門講座］

体育健康教育室 河野 玲子 副主任指導主事
『求められる養護教諭像』

塾生のレポートより

今回の講義では、養護教諭として「学校にいるだけで安心される存在」を目指したいと強く感じた。子どもだけでなく、教職員や保護者など誰からも安心される存在になるためには、養護教諭として、「冷静な判断力」「高い専門性」「人とつながる力」が求められていると感じた。

コロナ禍を経て、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化し、様々な健康課題も浮彫になっている。そうした中で、河野先生が講義の中で仰っていた「まずは体調」という言葉のように、子どもたちが充実した学校生活をおくるために、まずは“健康や安全が守られている”ということが重要な基盤となっていることを改めて理解した。また、“生命を守りきる”という言葉にもあるように、事故発生時や緊急時には「冷静な判断」が求められる。しかし、養護教諭一人で全てを抱え込むのではなく、応援を要請したり、管理職と連携したりし、学校全体で対応することが重要だと学んだ。平時においては、養護教諭が中心となって救急体制を確立することや、校内研修を充実させていくことなどが必要であることも分かった。

また、「養護教諭の専門性」を発揮し、子どもたちが卒業後も健康で過ごせるように働きかけていく必要があると感じた。例えば、子どもたち自身が応急処置や救命措置の方法を学ぶ機会を提供したり、子どもの実態に合わせた健康や安全に関する保健指導を行ったりすることも重要だ。また、自分自身の専門知識や技術を常にアップデートし、分からないことはすぐに調べ、誠心誠意対応することで信頼を築き、「安心される存在」に近づけると感じた。

養護教諭は担任と異なり、成績をつけない存在であり、経年的に子どもたちとかかわる存在である。そのため、養護教諭としての専門的な視点で子どもを深く観察し、丁寧に寄り添うことで、些細な変化や子どもの真の思いに気づける存在でありたい。ただし、そうした子どもとのかかわりを保健室の中で完結させずに、保健室で得た情報や気づきを担任や他の教職員と共有することが重要である。「人とつながる力」を発揮し、積極的にコミュニケーションを図り、「チーム学校」として担任や管理職等と同じ方向を向いて、子どもの様々な課題を解決していけるようにしたい。

養護教諭には、ケガや病気の手当だけでなく、最新の情報や知識の提供、さらには子どもからの「話をきいてほしい」などの思いに応えることなど様々なことが求められています。講座の中では現場の先生からの声もたくさん紹介されており、まさに、人の心と体の両面から健康を支える仕事であることが実感できたことと思います。子どもの身体的な不調の背景には心の問題も大きく影響しています。些細な変化や子どもの思いにふれたとき、「子どもとのかかわりを保健室の中で完結させずに、担任や他の教職員と共有する」ことを大切にするためにも、自分自身の人間関係力もさらに見つめ直す機会となったことでしょう。何より、今回の講座をとおして、養護教諭を目ざす仲間とじっくり話すことができ、貴重な時間となりましたね。　～クラス担当スタッフからのコメント～

分散会の様子

高等学校専門講座

養護教諭専門講座

第7回京都市教育学講座 ［総合支援学校専門講座］
総合育成支援課 久道 佳代子 指導主事
『総合支援学校における教師の実践』

塾生のレポートより

私は今回の講義で、「子ども達をできる存在として捉える」というお話を聞き、介護等体験でお世話になった白河総合支援学校の教頭先生もおっしゃっていたことを思い出した。どうしてもできないことに目がいきがちだが、子どもたちに「できない」ことがあるのは当然のことで、「こんな状況や支援を作ればこんなことができる」と前向きに捉え、子どもの「できる」を増やしていくための環境を作ることが教師に求められていることだと感じた。

私は、分散会でのキーワードに「なぜ？の視点をもつ」と「子ども達をできる存在として捉える」の2点を挙げた。今までの講義や、前回のロールプレイでもあったように、子どもたちの様子は目に見えているものが全てではなく、表面に現れている行動だけではない背景があることを念頭に置かなければいけないことを学んできた。今回の講義でもその重要性について改めて感じたとともに、その様子について「いつもと違うな」と気付いたら自分だけにとどめず、声に出すことが大切というお話から、同僚との協力についても改めて感じた。

「子ども達をできる存在として捉える」ことについて、中学校で働こうとしている私ができることを考えた時に、班の中で、実際に中学校で授業をしている方の意見を聞くことができた。テストの点が、クラス全体でみれば良くない点数だったとしても、前回より上がっていれば、「〇点上がったね！」とコメントするという話を聞いた。私は、これは生徒のできている点に目を向けていると思ったし、一人一人を大切にしていることが伝わるような行動だと思い、実践したいと思った。子どもたちを知るためには、観察することが大切であり、そこから子どもに必要な支援や、いつもと違うことに対して気付くことができるのだと思った。

最後に、講義の中で指導・支援の中で大切にしたいことに挙げられていた「実態把握と発達段階を捉える」という点について、久道先生の経験談から、中学生が小学生のプリントをしているということを知った時にショックを受けていたというお話があった。その子に合わせた指導が必要なものの、生活年齢への配慮も忘れてはならないのだと考えさせられる貴重なお話であった。子どもといっても一人の人として接することを改めて肝に銘じようと思った。

京都市の総合支援学校での取組や特別支援教育で大切なことについて具体的な例を挙げ、わかりやすく講義していただきました。子ども達を「できる存在」として捉えることは特別講座③や介護体験先の教頭先生、第３回の先輩先生も仰っていました。つまり、皆、同じ考えの元、子どもを育んでおられるということです。特別支援教育は教育の原点だと考えます。見えない背景まで子どもを理解する大切さ等、どの校種にも共通して大事なことがたくさんキーワードとして出てきました。一人一人を大切にするために取り組みたいことが考えられましたね。よ～く観察して「できる」を増やし、たくさん褒めて伸ばしていきましょう。　～クラス担当スタッフからのコメント～

分散会の様子

総合支援学校専門講座

第7回京都市教育学講座［栄養教諭専門講座］

体育健康教育室 増田 真弓 副主任指導主事
『求められる栄養教諭像』

塾生のレポートより

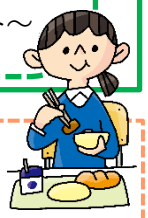
子ども達の食生活の課題を考えた際に、食育は社会の課題にも繋がる。講義の資料でも海外からの輸入製品や食文化の欧米化等がコメ離れや生活習慣病に関わると考えた。子ども達の課題を把握することで、家庭での生活が見えてくることもある。子ども達がこれから健やかに生きるために、どのような力を身につけさせたいのか、考えてもらいたいのか、自分の中でも指導の軸を作りたい。その軸を作った上で、次にどのような指導を行うのか考える。食育を行う主体は栄養教諭だが、一人で全校児童の食育を毎日行うことは難しい。さらに栄養教諭は兼務校にも行くため、栄養教諭がいない時は、学級担任からの食育も大切であることも改めて理解した。学級担任に子ども達の何に注目して、課題を見つけてほしいのか、見つけた課題に対して、どのような指導を行ってほしいのか、日々話をする必要性を考えた。その話をするタイミングも打合せという形ではなく、学級担任との何気ない会話の中で行うことで、話す話題の１つとなる。学級担任と連携して日頃から食育を行うことで、給食時間がただ食べる時間とならないよう取り組みをし、給食がよりよい食育の教材となるように工夫を考えていきたい。

グループワークでは、食べることに苦を感じている子どもに対してどのような対応をしていけばいいのかを話した場面がある。私自身もそうだが、苦手な食べ物がある時はどうしても気分が下がってしまい、食が進まない。栄養教諭としては全く食べずに残すということをせず、せめて １ 口は食べて、コツコツと食材に慣れてもらいたいという思いがある。その思いが全面にでないように子どもの負担とならないようにスモールステップの重要性について共感した。

今回の講義のキーワードでもある、繰り返しの指導を大切にしたいと思った。子ども達は何度も同じことを言われることが苦手と知っているため、同じことを繰り返し伝えることに恐怖心があった。けれど、子ども達が当たり前のように過ごしている日常を見直すきっかけとなるため、もしそのような場面が会っても、私も子ども達も前向きに物事を捉えられるような指導や声かけ、資料の作成などをしていきたい。そして、子ども達の課題や変化を見つけられるように現時点での自分の行動力にさらに意味を加えて、日々発展させていく。

栄養教諭の仕事の魅力・責務を改めて感じられたのではないかと思います。公立学校には様々な家庭環境の子どもがいます。あなたが考えたように、社会の課題の影響を受けている子もたくさんいます。それぞれの子が、自分の家庭の食生活を当たり前と思っています。学校給食を通して自分の食生活を見つめ、新たなことをたくさん学んでほしいです。個別の問題としての食の課題を抱えている子もいます。給食をきっかけに食への抵抗が減り、世界が広がってほしいです。給食と子ども達の間に栄養教諭の先生がいてくれることで、学びは広がり確かなものになります。今、給食を食べている子ども達が自立したとき、家庭をもったとき、健康な体をつくり生活を豊かにする食事を考えられる大人になってくれることを願い、自分の軸を持てるよう研鑽してくださいね。

～クラス担当スタッフからのコメント～



分散会の様子

栄養教諭専門講座

子どもたちの今と未来のため，社会のあらゆる場で
「子どもを共に育む京都市民憲章」を実践しましょう！
京都はぐくみ憲章